



## 「絶望の隣りに座った誰か」

お茶の水メディカル・カフェ in OCC 代表 榊原 寛



アンパンマンといえば、やなせたかしさんを思い浮かべることでしょ。やなせさんは、2013年に94歳でお亡くなりになりました。最後の最後まで、子どもたちだけでなく、大人にも勇気と元気を与えてくれた人です。いまだに口がやっと聞けた子どもでも、「アンパンマン！」と叫びながら喜んでます。被災者の皆さんにも、大きなアンパンマンのポスターを描いて、多くの人々に勇気を与えていました。歳ではないのですね。その人の心が若いか、その人の心が元気か、なのですね。樋野先生がよく言われる、「病気であっても、病人にはなるな！」なのですね。やなせさんが「アンパンマン」で世に出たのは、60歳頃だったそうです。42歳の時、仲間の漫画家たちが次々と有名になっていくの横目で見ながらも、売れない漫画家のやなせさんは、退屈しのぎに子どもの頃にやっていた遊びを思い出して、懐中電灯を手のひらに当ててみたのだそうです。すると、血の色がびっくりするほど赤く透けて見え、あまりに綺麗で見とれてしまったそうです。これほど絶望しているのに、体には赤い血が脈々と流れているんだ、心は元気がなくても血は元気なんだと、自分自身に励まされたような感じがしたそうです。その時、不意に「手のひらを太陽にすかしてみれば」というフレーズが浮かび、それが一つの歌詞にまとまったのだそうです。この歌は、やなせさん自身を励ます気持ちから生まれたのだそうです。

ぼくらはみんな生きている 生きているから 歌うんだ  
ぼくらはみんな生きている 生きているから かなしいんだ  
手のひらを太陽にすかしてみれば まっかに流れる ぼくの血潮  
ミミズだって オケラだって アメンボだって みんなみんな生きているんだ 友だちなんだ

やなせさんの晩年の詩に、次のような詩があるのを知り、私は大きな感動を覚えました。

絶望の隣に 誰かがそっと腰かけた  
絶望はとなりのひとにきいた 「あなたはいつたいだれですか」  
となりのひとはほほえんだ 「私の名前は希望です」

## 「どあらっこ 活動報告」

どあらっこ 彦田 栄和



5月27日に、第6回どあらっこを名城大学名古屋ドーム前キャンパスで盛大に開催することができました。どあらっこは、親など近くにがんを持つ子どもたち、自身ががんを持つ子どもたち同士の交流の場になれば、と思いながら今まで活動してきました。けれども、今までの会は大人の方の参加が多く、子どもが開設したメディカルカフェの意義を果たすことはできていなかったように思います。そこで、最近ではどうやって自分たちと同世代の方に来て頂くか、ということ課題として活動していました。その甲斐もあり、今回の会には参加者22名のうち半分程度が自分たちと同世代の方でした。参加者の子どもたち同士の交流もでき、充実した会になったと思います。今回、がん教育の重要性を再認識したので、この学びを8月4日に開催予定の「第1回どあらっこがん教育を考える会」に繋げて行きたいと思います。今後もさらに進化していくどあらっこに注目して頂けると幸いです。

編集後記: 今回、お二人の方にご寄稿頂きました。

牧師である榊原寛さん、そして、どあらっことして活動していらっしゃる彦田栄和さん。若い心と元気な心。これ程にも生きていく上で勇気と希望を与えるものはないのです。がん教育についての重要性が今後、多くの世代に渡って伝わることを願うばかりです。

このニュースレターも、そのきっかけの一つとなることと思います。

編集: 青柳志保 制作: 山田真子

Eメール: shihoabamakoto@gmail.com

一般社団法人がん哲学外来ホームページ <http://www.gantetsugaku.org/>

